中国四国教育学会　教育学研究紀要　第38巻　第２部（1992年）

ネパールの保健体育教育の現状（Ⅱ）

── マスター・プラン（1991～2001年）を中心に ──

松　岡　重　信
（広島大学）

Ⅰ　はじめに

先報（Ⅰ）では，広島大学ユネスコ委員会協力事業の一環としての教育視察の結果に基づいて，ネパールの教育事情及び体育事情の紹介とサポート事業のあり方について考察した。結果として他国に情報を提供するとか，先行経験を提供するとかは，さほど簡単な事ではないという観を益々強くしてきた。それは，該当国同士の歴史や政治体制の差とか言葉・文化・習慣の違いという事もあろうが，基本的にサポート側の支援体制づくりの問題であり，情報や経験の受け入れ側の体制固有の問題でもあるように思われた。

現時点で総合的に推察すると，ユネスコやユニセフOECDといった国際機関の資金や権威が，教育という分野では，さほど実力を発揮しえず，学校現場やそこでの教育方法・内容に直接何らかのインパクトを与えているとは評価しがたい側面もある。援助資金の流れの不透明さとか，他目的に流用されるような体制が極一部にしろ存在しうることと，それらの事が双方のかなりの人々に知られているという一種のシラケのムードも一つには指摘されよう。NGO（Non Government Orgnization）組織が世界的規模で活動し，一定の評価を得つつあるのも，こうした既成の政府レベル・国家間支援や国際機関による発展途上国への支援が実をあげにくいことの裏返し現象かも知れない。また，東南アジアとは言いながらも，ネパールやブータンに関する情報は，一部民族学的報告や地理学的報告を除けば，極めて情報が少ないのも現実である[1]。教育や体育の現状についての情報も基本的に欠落している[2]。一方，ヒマラヤの山々を背景に観光は盛んになりつつあり，民間レベルでの教育支援も観察されながら，組織的情報として提供される例は少ない[3]・[4]。

本論では，直接こうした発展途上国（ネパールに特定する）への教育開発支援の質・量や方法・内容を問題にする以前の課題として，保健体育教育の領域で何が求められているかを同定する作業を行うことを目的としている。この作業は実質ネパールを教育という側面より，より深く理解することと連動すると考える。また，制度としての教育が必ずしも完成していない国家として，今後どのように完成されていくかについても大いなる興味をもっている。さらに，保健体育のような教科がどのように定着し，発展していくかについても強い興味をもっている。

これらの課題解決のための基本資料は，ネパールにおける教育研究機関（Curriculum Textbook & Super-vion & Developmental Centre：教育文化省教育課程教科書行政開発センター；以下 CTSDC と略す）より送付された以下数点の資料である。

1）The Master Plan Team (Ministry of Education and Culture His Majesty's (July 31, 1991): The Basic and Primary Education Master Plan 1991－2001
2）Country Programme of Cooperation between His Majesty's Government of NEPAL and the United Nations Children's Found, Final Draft (November 1991): Master Plan of Operations 1992－1996
3）CTSDC/Primary Education Project (in Sanothimi, NEPAL, October 1990): Health Education, A Proposed Health Education Programme: Grades 1－5
4）青年海外協力隊員としてJICA勤務の古賀氏より送付されたの図，新聞，写真等資料（1992. 9）

等を基礎資料とする。これらは，量的に制約を受けてはいるとはいえ，ネパールの今日的教育の課題意識を反映した長期計画を示すものと考えられる。

Ⅱ　ネパール教育の統計的把握

ネパールという国の現状を把握しようとする際，他者から（国連発行資料，世界統計年報，ネパール国家etc.）の統計整理に頼って，例えば日本のそれとの比較を試みるということが必ずしも正確なイメージや，両国の差異を示すとは限らない。とりわけ教育に関わる統計は，そのベースにかなり曖昧な性格を含む可能性が否定出来ないからである。例えば「識字率」は，具体的には「対象人口」に対する「どのような条件を

表1　ネパールの国情を示す統計指標（先報，資料，1991）

項　目	日　本	ネパール
人口密度（／㎢）	324	128
都市人口比率（%）	77	9
人口増加率（%）	0.6	2.7
平均寿命（女）才	80.5	48.1
平均寿命（男）才	74.8	50.9
乳児死亡率	6.2‰	18.4‰
出生率	11.9　〃	41.7　〃
栄養摂取量	2864cal／1日1人	2052cal／1日1人
識字率	99.0%	29.0%
高等教育進学率	28.8%	4.6%
医師数	15.1／1万人	0.3／1万人
テレビ台数	585／1,000人	1.3／1,000人
電話機普及	2人／1台	880人／1台
乗用車普及	4人／1台	3831人／1台
1人あたりの国民総生産	21,040　$	170　$
日刊新聞数	562部／千人	NA
インフレ率	1.4%	8.8%
エネルギー消費	2619 kg	16.0kg
観光客数	206.2千人	22.3千人

備えた人々」の問題なのかが必ずしも統一的でない部分が認められる。

そうは言いながらも，表1は昨年のI報で用いた人口と経済・生活様態を示す指標を統一的に扱った朝日新聞発行の“The World Today”から引用し，独自に組み合わせた1990年統計指標である[5]。例えば「一人当り国民総生産（GNP）」でみればネパールは，バングラデッシュやカンボジャとともにアジアの最貧国の一つという言い方は許されると考える。他に際だつ指標では，「都市人口比」，「出生率」，「乳児死亡率」，「医師の数」などは，日本の状態を基本軸とするとき，余りに大きな違いがあることに気付く。

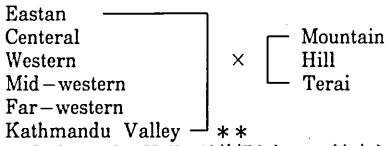
ネパール国民の現実生活で「より幸せな・・・」，「より安定的な・・・」生活観というのは，上記の指標に表現されていない宗教や国民性のような質的側面を含むだけに単純な比較は成立しない。そして，発展途上国という表現にも現実的にはかなり多様な国々が含まれる。現時点で戦乱・内乱状態にないとはいえ，王国制故の制度的混乱は一部に認められている。しかし，地理的特徴の故か，あるいはほとんど鎖国制に近い状態（政治レベルではネパールの周辺大国インドと国交をもたない）にあるからか，相対的には安定しているといえるかも知れない。

表2は，1981年と1990年のネパールの教育状態の10年間変化を学校数，生徒数，教師数で示したもので，ネパール政府発表資料である。これに従えば，小学校を中心に倍増に近い数字が示されている。国家的教育投資はかなりのレベルで発展し，教師の数も相当充足されつつあることになる。しかし，数値的にはよく理解できない部分を含んでいて，例えばこの統計における小学校での就学率（Gross Enrolment Ratio：総生徒数／該当年齢人口）が1990年で102%とされている。しかし，聞き取り調査（1991.08：筆者らのネパール訪問，1992.01：ネパール教育行政官4人の日本訪問）では，1年生の就学率が必ずしも100%ではなく，しかも学年進行で，とりわけ1年生や2年生に相当数の，いわゆるDrop-outが出ていることが報告されている。しかし，別の年齢からでも学校やNon Formal Schoolへは復学できるシステムもある。また学校サイドが，自らの成績を下落させないためにDrop-out数を隠すといった実態も認められる。そのために生徒実数と生徒登録数が一致しない可能性は非常に高い。こうした背景には，子どもといえども農作業等には，重要な労働力であること，とりわけ女子は子守や家事で，ドロップ・アウトする確率が農村部でかなり高いとされる。

表2　ネパールの10年間の教育統計
10 Years Education Data on School, Students, Teacher by Level

	1981 (2038) ＊	1990 (2047)
School		
Primary	10,628	17,842
L. Sec.	2,786	3,964
Secondary	918	1,953
Students		
Primary	1,388,001	2,788,644
L. Sec.	169,564	344,138
Secondary	144,331	364,525
Teacher		
Primary	29,134	71,213
L. Sec.	12,245	12,399
Secondary	4,909	10,421

注1）＊：ネパールにおける年号を示す。
注2）資料原典は，ネパール王国を次の6地域特徴に分けて統計をとっている。



注3）＊＊：Kathmandu Volleyは首都カトマンズを中心とした盆地で注2）の右に該当しない。統計上単独地域である。

Ⅲ　ネパールの国家的長期計画の特徴

今次のマスター・プランは，長いネパールの歴史の中では，極最近の民主化運動と連動している。それ以前は，僧侶養成や軍人養成・宮廷学校（Durbar Shool）に限定された歴史が随分長くあったことを田中研一は報告している[6]。

1951年が民主化のうねりが起こり始めた年（日本の明治維新であろうか？ネパールは二次大戦に8,000人を庸兵として英国に派遣していた。現在も例えばグルカ族のような民族が相当の人数を庸兵として英国に派

遺している）で，その民主化から逆算して6回または7回の教育改革政策があったことになる。この間の成果は，以下のごとくである。

	1951	1986
識字率	2.0%	34.8%
就学数	10,000人	2,400,000人

（概算である。田中研一氏資料より）

この度の第8次教育改革の長期計画も質的・量的整備計画の延長にあるとみなせるが，決定的には整備に必要な経費の問題が現実性をもって考慮されはじめた点にあると言える。また過去の計画が基本的には5ヶ年計画であったのに対して10ヶ年を射程にいれる可能性が見いだせるところにも大きな特徴があるといえよう。このマスタ・プランの主たる実行計画の要約は次のごとくである。

1）プラン実行の目標

・短期的：最終的な三つのシナリオ；

・予算：緊縮予算の場合
通常予算の場合
最適予算の場合

・将来予測の精度

・長期的：1990年代の状況に対応した政治や活動計画の長期計画を各地域（Sub-Sector）に準備する。

さらに効果的・効率的な視点からプログラムを発展させたり，プロジェクトを組んでいく。

2）マスター・プランの目的

・小学校の質的向上（eg. 識字・算数・問題解決能力）

・小学校の受け入れ体制（eg. Non-Formal Education，300の女子学校の設立，女性教師を増やす，etc.）

3）小学校教育の効果を高めるために

・Drop-out, Failure repetition rate, (Grade 1, 2) 等のパラメータを変化させる。

・低学年用図書（館）整備

・教師教育や管理体制／人材確保

4）小学校教育の体制強化

・カリキュラム，教科書，授業環境などの改善

・学齢期・学校だけでなく，家庭や仕事の問題とからめて，栄養・生活・衛生・人口問題・地域生産性問題に取り組む

このような実行計画は，予算措置に対しては柔軟な姿勢を保持しているが，逆にいえば見通しがつきにくいことの反映と受け止められなくもない。予算に絡まって過去を整理すれば，ネパール国家予算に対して教育予算（10数%）は表4のごとくである。

Ⅳ　ネパールの保健体育をめぐる状況把握

先報でもふれたように，ネパールの小学校に於ける保健（健康）・体育のカリキュラムについて反復すれば，教科の構成が日本とでは相当異なっている。体育的教科としては，現実的には「図工・体育・掃除」と

表3　第8次の10ヶ年ネパール教育計画における達成目標

Quantitave Targets : Universalisation of Primary Education

	Prescnt Status (1989)		Targets for 2001
6－10 Populatin	25,07,841		33,78,400
Enrollment	25,26,147		36,20,500
Gross Enrollment Rate	101		107
Boys	126		114
Girls	73		100.0
Schools	15,834		22,404
Teachers	63,945		90,513
Underqualified	7,321	11.45%	Qualified－trained
Untrained	38,641	60.42%	100%
Cycle Completion Rate	28%	Male	60
		Femalc	57
Internal Efficiency of the System			
Boys	41.4		68.9
Girls	35.6		65.8
Literacy Rate	15－44 years old		
National	39.3%		60%
Male	56.9%		71%
Female	21.7%		48%
Jomtien Conference Literacy Goal:Halving the 1990 Adult Illiteracy Rate(15－44 years)			
Male	78.5%		
Female	60.8%		
Total	69.6%		

表4　ネパール国における教育予算の推移

Educational Statistic of NEPAL, 1986－90 (Ministry of Education & Culture Manpower & Statistics Section)　(in 000 Rs)

S. No.	Heads	1985／86 Amount	%	1989／90 Amount	%
1.	Primary Education	442369	30.70	967119	46.37
2.	Lower Secondary & Secondary Education	188868	13.11	287673	13.79
3.	Adult Education	4224	0.29	8268	0.40
4.	Curriculum, Textbooks, & Educational Materials	17230	1.20	62576	3.00
5.	Physical Education & Sports	10905	0.76	74068	3.55
6.	Miscellaneous Education Project	3255	0.23	*	*
7.	Education Administration	46248	3.21	65241	3.13
8.	Education Research & Statistics	115	0.01	190	0.01
9.	Scholarship & Student Welfare	5526	0.38	4796	0.23
10.	Supervision, Traning, & Publicity	3011	0.21	8639	0.41
11.	Archaeology	5834	0.40	10865	0.52
12.	University	614524	42.65	465937	22.34
13.	Science & Technology	28352	1.97	43800	2.10
14.	Integrated Rural Development	13977	0.97	*	*
15.	Cultural Development	817	0.06	998	0.05
16.	Technical & Vocational Education	15508	1.08	32732	1.57
17.	Others	39954	2.77	52667	2.53
	Total	1440717	100.00	2085569	100.00

*Included in "Others"

して，1～3年に位置づいている。体育が単独教科として扱われるのは4，5年である（週2コマ，但し週休2日制）。保健は「理科＋保健」として4，5年に配置されている。これらは日本流にいう「生活科」のような性格を想定させるものである。しかし，現実的にはこれらが前回改訂計画に従って実行されていると見なすには余りに無理がある現実であった。

先述資料[3]（Draft No. 2）が示す健康教育計画の概略は，小学校5ヶ年間のスコープとシークエンスを構成する原理として，「健康教育の最低基本のセットが教えられる」ことと「家庭・学校やコミュニテイーに対応した新知識の獲得」を掲げている。また，健康教育は，学校の健康教育環境から国民的に拡大されるされるべきもので，ネパール教育文化省の学校環境整備計画とリンクしている点を文頭で強調している。健康教育の最低基本のセットとかその中身は，明確には同定出来ないが，学校をいわば国民健康教育のセンター的な位置づけをしていることになる。それは，基本的には他に教育機関や医療機関が少ないことによる（表1参照）と思われる。しかし，就学率や卒業率がさして高くない状況があるにもかかわらず，こうした宣言めいた表現をとらざるを得ないところに，こうした計画書の特有の意味があるように思われる。

そして，本資料における記述を教育課程論や教育計画論として吟味してみると，各学年に配当するいわゆるスコープを「衛生」・「環境」・「食物」・「疾病」・「安全と救急」で構成し，さらに「知識；（・・を理解する，・・説明する」・「スキル；・・にする，・・を区別する，・・を利用・使用する」・「態度；・・を避ける，・・を報告する，・・の世話をする」のような表現形式を採用して，いわば「行動目標」を示している。その具体例が表5（1－5年の「衛生」域）である。行動目標の形で具体的にカリキュラムや授業の目標を規定している。極めて現実的で生活密着的であるが，それだけに生活に密着した衛生問題があることの裏付けともいえる。「環境」や「食物」・「疾病」・「安全と救急」でも同じような表現が可能である。

また，体育では表6（小学校5ヶ年），表7（中学校2ヶ年，高校3ヶ年（但し一部欠落）古賀氏提供資料より）に示すような内容で実行されていることになっている。高等学校以上の体育の内容は，金田の報告により詳しいが，基本的に施設や用具に規定される側面と同時に，高等学校の卒業資格に該当する中等教育修了資格（School Leaving Certificate; SLC）試験合格の手段として利用されがちであるとも指摘する[7]。

主として，小学校の体育内容は，年齢的にはさほど矛盾のない構成と評価できるし，施設用具関係の実態からみても現実的であると思われるが，具体的中身や動作形式がどのようなものか現時点で判明していない。スポーツ人類学（金田英子）[8]の立場からネパールの民族スポーツを紹介している写真集（体育科教育1992. 9）と比較しても高等学校のカバルディー（Kapardhee or Kabaddi）に共通点を見いだせた程度であった。

表5　ネパール教育計画における健康領域「衛生」のスコープとシークエンス
(Health Education, A Proposed Health Education Programme : Grade ; 1－5)

Personal Hygiene | Environmental Sanitation | Food | Common Illness | Safty and First Aid

SCOPE AND SEQUENCE

Grade 1	Grade 2	Grade 3	Grade 4	Grade 5
1. Washing : －Face and Hands 2. Cleaning : －Nose, eyes and ear from outside. 3. Cleaning : －teeth (brussing) 4. Cleaning : －feet 5. Cleaning : －nail (importance of cutting nail) 6. Cleaning : －body (general) Good P. H. habits －Clean playing areas and mate rials. avoiding : －sneezing openly －spitting －coughing openly －putting dirty thins in mouth	1. Cleaning teeth : －(Proper skills) －getting new teeth (what to do) 2. Cleaning hair Properly －Washing －Drying －Combing 3. Cleaning body (specific) Good P. H. habits －Proper cleaning of nose. －Proper posture (siting) reading and walking) Avoiding : －Wipe nails and snot on clothes －Biting nails, clothes and pencil.	1. a. When and why to clean face, hands, eyes, nose feet, hair, body, teeth and mouth. b. Materials for cleaningand washing. c. Problems related to eyes, nose and mouth Good P. H. habits －Frequent washing －Using of soap －Avoiding getting objects in eyes and nose.	1. Common problems of－ －Eye (dust, insect and finger around eyes) －Mouth (bad breathing and teeth decay) －Ear (ear pain) －Nose (dryness, nose block) －Skin (boils and dryness) Good P. H. habits －Avoiding－putting foreign objects poking in nose, ear and mouth.	1. Takig care of : － －Mouth (eating hot and cold, non ediable things) －Eye (seeing in bright and night, eye rubbing, distance and close looking, direct looking in sun) Nose－ (sharp odour, smelling poisionous things. Instering finger into the nose) Skin (dirt, touching, hot and cold objects.

表6　ネパールの体育プログラム（小学校5ヶ年)(JICA，古賀氏提供，19921，10)

領域／学年	1	2	3	4	5
1）マイナーゲーム	人数合わせ ハンカチ落し 等11種	鬼ごっこ 猫と鼠 等11種	鎖鬼ごっこ 円ドッジボール 等11種	ホットポテト 等5種	鶏と鷲 等5種
2）模倣	アヒル歩き 等5種	カエル跳び 等5種	象歩き 等5種		
3）ストーリーゲーム	犬と猫 ライオンとウサギ	飛行機 洗濯	2種		
4）集団行動		○	○	○	○
5）体操	／	／	／	腕・脚・腰の運動	腕・脚・腰の運動
6）基本的な動き	／	／	／	片足ジャンプ 両脚ジャンプ 両脚ジャンプし片足着地 ホップ	頭上ボール投げ 足でボールを止める キック
7）リレー 8）陸上	／ ／	／ ／	／ ／	3種 ランニングの知識 フォーム　etc.	3種 ランニングの知識 スターテイング etc.
9）歌	1年生の歌	2年生の歌 学生の歌	3年生の歌 学生の歌	4年生の歌 学生の歌	5年生の歌 学生の歌

表7　ネパールの体育プログラム（中学校2ヶ年＋α)(JICA，古賀氏提供，1992，10)

領域／学年	6	7	9，10
1）リードアップゲーム	Number Football Circle Football Throw Ball	Line Football Five_men Football EndBall Keep it up	1　Introduction National and International Organization **Sport :** 2　Introduction and Rule, Volleying, Digging **Volly Ball :** Under_hand Servise, Spiking, Blocking, Hook Service 3　Introduction and Rule, Sprint and Middle Distance **Athletics :** Run, Javelin Throw, Shot Put , Hig Jump Long Jump, Triple Jump, Pentathlon 4　Introduction and Rule, Kicking, Trapping **Foot ball :** Dribbling, Heading 5　Introduction and Rule, Dribbleing, Chest pass, **Basket ball :** Free shot, Lay up and Hook shot 6　Introduction Rule Practise **Kho-Kho :** 7 **Teniquito** (Ring tennis) : Introduction Rule Practise 8 **Kabaddi :** Introduction Rule Practise 9 **Badminton :** Introduction and Rule, Gripping, Service Over hand, Fore hand, Back hand, Under hand Foot work, Drop shot 10　**Yoga :** Introduction, ／／／etc. 11　**Drill and P.T. :** (9, 10) 12　**Song :** (9, 10) ・Sport　5% ・Vollyball, Athletics　40% ・Drill, P. T.　20% ・Foot ball, Basket ballPKho-Kho Teniquito, Badminton, Yoga, Kabaddi　30% (Choose 5 items) ・Song　5%
2）リレー	Rescue Replay Tunnel Ball Replay Over Head Replay	Crab Replay Ball Roll Replay Dribble Replay Circle Replay	
3）陸上	ウエスタンロールの知識 1フィートのジャンプ	ゴムボール投げ 砲丸の要領でのボール投げ	
4）体操	腕の運動 腰の運動 脚の運動	腕の運動 腕・腰の運動 腕・脚の運動	
5）集団行動	○	○	
6）歌	6年生の歌 学生の歌	7年生の歌 学生の歌	

注）第8学年元資料脱落
(JICA：古賀氏提供)

現実に中学校（L.Sec.）や高等学校（Secondry）を参観していない点，またいわゆる上流階層が行くとされる私立学校は一切観察できていない点を反省しても，さらに少面積国ながら「人種のルツボ」と表現されるネパールに，保健体育という教科がそれなりの地位を確立して目的・内容・方法を体系化している段階には至っていないといえる。表4に見えられるように体育・スポーツにも予算配分は見られるが，この予算は特に学校教育，とりわけ小学校教育とは関係していないように考えられる。そして，学校や教師の質的量的拡充・整備の作業が，まだまだそして当分優先する課題であるといえる。第8次長期計画もそのことを示していると読み取れる。

V　ネパール保健体育教育への見通し

現実的には，ネパールの人々の生活そのものが，地理学的にも生活習慣や法律問題・税制度としても，理解しかねている段階である。それでも前節で，保健にしても体育にしても統一的に運営されているとは考えられないし，確立されていないと結論した。

学校制度が日本流にいう義務教育制度になっていない点，制度的にはインドの影響を受けていて，それが教育発展の阻害条件になっている可能性を否定できない点，体育や健康領域の制度的位置づけが歴史的に浅い点，等々保健（健康）・体育領域の重要性を云々する前に，実に多くの阻害要因が想定される。

その理由として筆者が日本人であることの限界かもしれないが，生活を考える軸がまるでズレており，学校のイメージがまるで異なる。保健・健康にかかわるポスターの作成や教科書の工夫・改訂は1951年以降20回を越えているとされる。それでも，「平均寿命」や「乳児死亡率」・「医師の数」などののパラメータが示すごとく「衛生観念」とか「公衆衛生」・「予防医学」・「健康教育」よりも優先し，生活を規制している「何かがある」と考えねば説明できないし，納得も出来ない。

逆にいえば，それだけに「健康教育」は，日常生活・地域生活に密着した教材の開発や教具の開発をより必要としているともいえる。だが，＜蝿を不衛生の典型＞と指摘することは簡単でも，＜蚊がある種の疾病を媒介する＞と教えることは簡単でも，＜運動することは良いこと＞と言うのは簡単でも，＜スポーツは世界共通性をもつ文化である＞と主張するのは簡単でも，その事がネパールの人々の生活にどのような意味や意義をもちうるか，或はどのような実益をもたらせるかが予測できなければ，協力するとか，協力の方向性を探るとかいうのはそら言に近いことになる。従って，保健体育領域のカリキュラムや教材開発という観点からみて，直接阻害要因となりうる条件をクリアーするか，直接的には干渉しうることでなければ，その「何か」阻害要因の最大のものを理解出来なければならない。そうでなければ，学校設備や教員の増設・増員というネパールの国家的事業と，パラレルに保健体育の教材開発や教具の開発も暗中模索の試行錯誤の作業にならざるをえない点を可能性を覚悟しなければばならない。

来年（1993.11）秋，再度ネパールを訪問することで，最大の阻害要因の「何か」を把握する努力をしたい。しかし，それはおそらく極めて多様な現象として浮かび上がる「貧困」の一言かも知れない。

文献および注

1）川喜田二郎：Nepalにおける民族地理学的諸観察，第2報　居住形態，地域組織，民族集団の生態学およびTibet人村Tsumjeの研究，民族学研究19，212－312，1956

2）鈴木淳一：海外事情：ネパールの体育・スポーツ事情，体育の科学，第42巻第11号，893－896，1992

3）朝日新聞社：朝日旅の百科海外編22；インド，ネパール，1741－1752，1988

4）松岡重信：ネパールの体育教育の現状 —— 日本の体育教育との比較の観点から ——，中国四国教育学会教育　学研究紀要，第37巻　第2部，399－404，1991

5）朝日新聞社：新形式，世界170ヶ国データブック，The World Today，p.009，p.024，1991

6）田中研一：「ネパールの学校教育に関する情報集」，非売本で青年海外協力隊員として，合計6ヶ年ネパールに滞在し，教育部門で活躍した人物の書き残した教育情報集である。カトマンズＪＩＣＡ事務所にて入手できたものである。極めて詳細な教育状態の記述がなされている。しかし，意図的にではないと推測されるが「保健健康領域」や「体育領域」の記載は少ない。1989

7）金田英子：ネパールにおける高等学校体育の成立と展開，日本体育大学紀要，第21巻，1号，21－30，1991

8）金田英子：世界の民族スポーツ(6)ネパール，体育科教育，40巻10号，5－8，1992